

# 平和とは

三次市立十日市小学校

第6学年 永澤 由依

平和とは

三次市立十日市小学校六年

永澤

由依

「平和とは？」

八月六日の登校日に、自伸会の平和集会で

みんなに問いかけがあった。

人間には欲があり、そのための争いごと

起こる。明らかに平和でない「戦争」という

状態で言うと、自分の利益を優先にしたから

起こってきたことだと思う。お互いを尊重し

合って話し合うことで、戦争は避けることが

できるのではないだろうか。

お盆に宇佐市柳ヶ浦の父の実家に墓参りに

行った。曾祖父は、戦争で亡くなり実家近く

の若宮八幡神社にある戦没者合同慰霊碑にま

つられている。その横にある別の碑に目が留

まった。その碑には、飛行隊死者の氏名、二

十歳から二十六歳の若い年齢、神風の文

字が刻まれている。柳ヶ浦にある長い真直

ぐな海に向かう道路は、かつて滑走路であ

たこと、そして戦闘機の格納庫が田畑にあ

たことなどを見聞きすると、ますます戦争が  
身近に感じられた。神風特攻隊として戦死し  
た方々を悼む忠魂碑を目にして、私は宇佐海  
軍航空隊について調べてみた。  
特攻とは、爆薬を積んで相手国の軍艦など  
に飛行機ごと体当たりさせる自爆攻撃のこと  
だ。命中率が高いとはいえず、戦況が悪化する  
と、六千人を抱える宇佐航空隊が特攻の基地  
となり、あの沖縄戦で、百五機が出撃し、そ  
のうち八十二機百五十四人が戦死したそう  
だ。親、家族を思いながら、逃げ道なく敵に突  
っ込む瞬間、隊員たちはどんな気持ちだった  
のだらう。国のためと教育されていたとはい  
え、特攻つまり「死」に直結しているとしても  
怖かったはずだ。よく、「死ぬ覚悟で戦え」  
と言うが、本当に死ぬのが分かっている出陣  
する勇氣は出たのだらうか。送り出す家族も  
そうだ。愛する人を絶対に失いたくない、行  
かせたくないたいと思わない人はいないだ  
らうか。その時どうしたのだらうか。

国の偉い人たちは、勝つことしか見えなく  
なっていたのだろうか。人を道具としか考えて  
いなかったのだろうか。そもそも特攻は将来  
の日本のことを考えて始まったことなのだろ  
うか。私は、そこには命の軽視があると思う。  
もつと一人ひとりの命を大切に思っ  
ていれば、こんな悲しい作戦は生み出されなかつたので  
はないか。少なくとも、特攻に行つた人たちは  
の方が、将来の日本のことを真剣に考えてい  
たのではないか。  
戦争は、絶対に避けなくてはいけないこと  
だ。戦争は、お互いを被害者にも加害者にも  
する。相手をとことんやつけなくては生き  
ていけないことに追いこまれるのだ。  
今は、平和と呼べそうな世の中であるが、  
競争社会でもある。受験など、相手を倒し相  
手より良い結果を出すことで、その場面を生  
き残ることができる。勝ち負けはどうしても  
起こる。大切なのは、その後である。常に相  
手を思いやり敬意を払える心を持つ努力が必

要だと思う。生きる道は色々あり、お互いが  
お互いの良いところ、悪いところを認め合い、  
助け合い、尊重し合って共に生きいきと生き  
ることが大切である。それを、しようと思っ  
たらできるわたしがいる今の世界は、とても  
平和で幸せなんだと思った。  
「平和」とは、共に生きるための努力がで  
きている状態だと言えそうだ。ただ、私が知  
っている「世界」は、まだまだ「まあいのかも  
しれない。なんとなく遠くから不おんな足音  
がしているように聞かされる。  
自伸会からの問いかけ、「毎日の身近な生  
活の中での平和が何かを考え、求めること」  
がまずは私たちにできることだろう。しかし、  
それを見つけていることは感覚的に大へんだ。  
私の学校は、私の学級は平和か？という問  
いに向き合わないと、平和を守る大人になれ  
ないのかもしれない。

## 指導者の言葉

国語科「自分の考えを明確に伝えよう」の学習を終え、夏休みの体験を通して、平和について考えたことを意見文にしました。

8月6日の平和集会に、児童会執行部から「平和とは、過去の戦争を憂うのではなく身近な生活の中で平和が何か考え、求めることではないか」という提起がありました。児童は、報道や地域の語り部の話を聞く活動を通して、戦争はなぜ起こるのかを考え、お互いを尊重し合うことで戦争は避けることができるようになるようになりました。

お盆に戦争で亡くなった曾祖父の墓参りに行った際、ふと目に留まった神風特攻隊の文字から、故郷の地で戦闘機が飛び立っていた事実を知り、遠かった戦争を身近に感じ始めます。そして、自分から宇佐海軍航空隊について調べ、疑問を整理し、平和についての考えを深めていった様子が文章から伝わってきます。

「平和とは、共に生きるための努力ができている状態」であることに気が付き、だからこそ、幸せな今をどう向き合うか真剣に考え、自分の意見を正直に書いています。

歴史学習を深め、時事問題を見つめる力も付きつつある6年生で、事実と向き合わせる節目学習と社会情勢に関心を示させながら、自分の生き方を見つめさせる取組を大切にしています。